

翻訳及び解説

アンリ・ワロン『行為から思考へ—比較心理学試論—』（1942年）  
第1部 第2章 場面の知能（その1）（試訳）

亀谷 和 史  
日本福祉大学 教育・心理学部

Henri Wallon “De l’acte à la pensée: Essai de Psychologie comparée” (1942)  
Première Partie Les Sources de Comparaison  
Chapitre II La psychologie des situation

Kazufumi KAMETANI  
Faculty of Education and Psychology, Nihon Fukushi University

Keywords：場面，知能，J. ウィンチ，条件反射，人格

訳者解説

本翻訳は、「第1部 比較の源泉」の「第2章 場面の知能」の第1節及び第2節の一部である。この章では、「推論的知能」または「論理的・言語的知能」に対置し、それとは峻別される「場面の知能」について論じていく。「場面の知能」は、「今」「ここ」で発揮される感覚運動的で、具体的な「空間的知能」である。「実用的知能」と言われることもあり、それと重なる知能である。この知能は、表象や言語・思考を手段としない。もっぱら直感や洞察に依る。

ワロンは、第1節で簡潔に「場面の知能」の本質を論じたのち、第2節からは、条件反射学説（パブロフ）の意義と限界について検討していく。子どもの自発的反応の発達を条件反射のメカニズムによって説明しようとした、J. ウィンチ（J. Wintch）の見解を個々の具体的な事例をとりあげつつ批判していく。

第1部第2章は、全235頁中39頁と他の章と比べて、比較的分量が多い。ワロンは、定型発達の乳幼児を自ら

観察する研究は行っていないこともあって、本章では、J. ウィンチの観察事例が多く引用され、それをもとに批判的考察を加えていく。

第2章全体についての解説及び位置づけ等の検討は、また機会をあらためてまとめた。

- ・訳出にあたっては、ワロンの用いる重要用語やキーワード、および厳密に原語を参照すべき部分では、フランス語を示した。原文に忠実に、ワロンが使用しているもののみ、同様に、イタリック等をつけた。
- ・またどちらが適切な訳語かが確定できない場合などは、小括弧（ ）をつけて他の訳語も示した。
- ・また数行にわたる長い原文の訳出では、原則として、セミ・コロンの（；）のある文章は、句点（.）で区切り、一文とした。
- ・日本語訳として、文脈等を分かりやすくするために、必要に応じて、補足の文言を大括弧〔 一訳注〕として示した。また同様に大括弧〔 〕による訳注を

適宜、加えた。

- ・原著は、Flammarion, Éditeur, 1970 によった。

## 第2章 場面の心理学

心理学の対象が、個人ではなく、ある場面 (situation) でありうる可能性がある。[その場合] 個人は、その場面によって引き起こされた効果と一つに混じりあっている。また場面がもたらす困難のなかから探し出され、発見された解決の方法とも、個人は混合している。行為は、意識や人格といった (説明) 原理なしに、もっぱら外部から考察される。主体は、反応させられる状況 (circonstances) と密接に結びついていて、その行動によってのみ考察される。状況の役割や行為の役割を、先験的に (アプリオリに) 限定するものは何もない。生物学的構造や精神的創造の役割、生体 organisme や人格にそれぞれの役割を想定し得るものは何もない。観察と分析と比較だけがそこに作用している要因を区別することができるのである。厳密に客観的なこの (場面を分析する) 方法は、外的な力と内的な力とが不可分であること、物理的必然性 (身体的必要性) と精神的可能性とが分ち難く結びついていることから出発する。だが、この方法によって、(そこに存在する) 対立や葛藤を最も明らかにし、そこから生じる分化を最も理解することができるのである。

というのも、生体と環境との最も初期の関係は、それら相互の作用が完全に結びついている関係だからである。(生体と環境との) 表面的な接触は、外部からの影響に直面した個人が、より自律性を獲得することによってのみ限定されてくる。個体であるという感覚 (le sentiment personnel) は、意識によって外部の現実に対置された極限なのであるが、それは、古典的心理学では、すべての心理的な発現のなかに含まれていると考えられていた。しかし実際は、主体と環境とが分化した後でしか現われてこないものなのである。そのような (個体の) 感覚は、すでに複雑な活動を行っている場面であっても存在しない。それどころか、それはまさに、運動を阻止する場 (領域) と、それを克服しようとして行う運動の場 (領域) という両者間の一種の力動的な融合である。たしかにこれらの相反する、相補的な運動がおこり得る変化 (vicissitudes) によって、最初の分裂 (分

化) (clivage) が始まるだろう。しかし、事物と個人が、直接接触することだけでは、自我と他者との区別を固定し、安定させるための定式 (formules) は、生じ得ないだろう。

ある場面は、たしかに観念的でありうる。すなわち、もっぱら表象にだけに基礎づけられている。その場面は、想像的なあるいは知的な次元での解決しか (結果として) もたらさない。しかし、そのときの場面は、素材としてのシンボルや観念を必ず必要とし、(それらによって、その場面は) 言語や集団的思考に培われてきた精神活動から再構成されるのである。したがって、その場面では、測定が困難な諸条件や結果 (répercussions) を伴い、その効果は直接見ることはできない。この章で考察されている場面は、まさに感覚運動的な面 (次元) に属している。つまり対象や状況、反応は、その場面全体のなかで知覚できる。もちろん、引き起こされる反応の水準は、きわめて多様である。知覚と運動を結びつける回路は、ときに応じて、個人に依りて、また種に依りて構造にまで高まるし、ある結合を実現したりもできるのである。そこでは、寄せ集められた諸要素の豊かさや結果の有効性によって、非常に多様な範囲の知的能力の判別が可能となるのである。しかし、そのような構造や結合が、どんなに巧みに状況を組織するように見えても、実現しているのは、常に現在の具体的なもののなかにおいてなのである。

この知能は、それぞれの場面にふさわしい解決を発見することによってのみ表現され、その真価を発揮するのであって、しばしば実際の知能 (実践的知能) (intelligence pratique) とよばれてきた。したがって、それは、言語的で推論的、反省的で意識的な知能、一言でいえば、認識の知能と対立することを強調する。推理、分類、定義、イメージからなる操作は、古典的心理学によってもっぱら研究されていた。しかしながらその用語は、混乱を招いている。実践上の問題は、明確な推理を引き起こす場合もありうるし、[言葉で] 表現された認識に訴える場合もありうる。実践は、応用や有用な結論をそこから引き出す技術として、しばしば理論に対立させられている。[だから] 空間的知能という名称の方がより正確であるし、より多くの意味をもっているだろう。空間の外在性にこそ、感覚運動的活動は、結びついているのである。そのやり方が言語によるものでもなく、精神的でもない解決は、空間のなかでこそ表現され

るはずである。ともかく、確かめられた結果を分析することによって、場面の知能を空間内に存在する、あるいは存在し得る関係の直観に帰着させることができるだろう。

観察される場面は、それ自身で起こることもあるが、多くの場合は人為的に組織される。実際、偶然の機会をとらえて場面を分析するよりも、実験を行なうことの方が、より組織的な研究がおこなうことができる。また確かめるべき効果を限定することもできるし、直面した一連の項目を一つひとつ、より明確に考察することもできる。たとえば、状況の配置を、研究の唯一の対象、すなわち効果の唯一の決定因になるように、選択し、厳密にすることができる。その場合、ここから効果が生じるかどうかを確かめることだけが問題である。反対に、実験のやり方によっては、そこでの変化に応じた反応や、実験全体のなかでの反応、最後に、主体自身に固有の自発性を、とりわけ明らかにしようとすることもできる。

しかし、場面の選択は、同様にまた、実験者が場面の知能をもとに抱いたイメージに依存している。[その場合]、イメージは、実験が完全に成功する過程を数え上げることのできる要素に分割するように、結びつけられるであろう。こういうやり方がとられたのは、部分的にたまたまうまく遭遇した「要素の」総和が解決であるとみなしたり、本来、徐々に統合されることによって最終的に統一できる明確な行為を知能とみなしたりする人たちによってである。反対に、知的行為は一つの全体であるとみなす人たちがいる。その人たちにとっては、全体での諸要素は、解決に至るまで相互に引きつけあい、置き代わっていると考えられ、全体の統一は、高まったり弱まったりしながらはじめて維持されていると考えられていて、それこそ成功の条件であるとみなしている。その人たちは、好都合な状況を利用することによって、被験者に経験の場を自由に組織させるように、その経験の場を設定する。こういう方法の相違は、異なる結果を引き起こす。誤りは、知的行動と混同されている一面的な結論をそこから引き出す点にある。にもかかわらず、実際、これら2つの説明の傾向は、それぞれ学者に応じ、いずれか一方が優勢をしめている。ときには、同じ実験に関しても、違った説明がされている。一方の出発点は多元的であり、他方の出発点は単一的である。後者にとっては、全体と組織的な行為が出発点だし、前者にとっては、部分と状況の作用が出発点なのである。

\*  
\*       \*

状況に優位性を認める一方のタイプの説明は、最初の精神的な結合が条件反射と同一視されるタイプのものである。パヴロフとその学派は、厳密な実験によって、どのようにして刺激と反応との間に、最も多様な連合を実現することができるかを明らかにした。パヴロフの何人かの弟子たち、なかでもクラスノゴルスキーは、教育が、部分的には、有用な条件反射を作り出すことにあるのではないかと研究をおこなった。最後に、他の学者たち、とりわけウィンチは、子どもの自発的な反応の発達を、ある条件反射の機構として説明することを望んだ。その条件反射の起源は、最も習慣的な日常生活がもたらす状況との遭遇にあると考えられている。このように条件反射の効果は、状況に行為を合わせ、その結果、行為を調節して環境に適応させることにあると考えられているようだ。精緻で変化しやすいために、これ以上の分析を免れさせるような発現、たとえば知能のような発現をより要素的な反応の次元に同一視してしまうこと、また実験的に操作しやすい、よく知られたメカニズムに同一視してしまうことへの誘惑は、常に大きいものがある。しかし、このように現象を単純に把握することによって、必要不可欠な要因を説明から排除してしまうようなことがあってはならない。

動物の生理学的メカニズムでは、それぞれの反応は、パヴロフが無条件刺激と名づけた一定の刺激に依存している。もしこの刺激になんらかの別の印象が伴い、そのうえ、すぐにこれが直接先立って起こるならば、その動物の反応を引き起こす能力はこの印象に転移され、したがって条件刺激となる。転移が行われるためには、普通、2つの刺激が何度もいっしょに起こらなければならない。逆に、条件刺激が非常に長い間、それだけで繰り返されると、最後には、再び効力がなくなる。もっともそれは、作用が働き尽くされてしまったことによるのではなく、制止されたことによってなのである。条件反射の能力は、多かれ少なかれ発達させられるものだ。それは、2種類の条件をもっているように思われる。一つは、転移の速さ、規則正しさ、持続性に対応するものである。もう一つは、似かよった印象間の分化に対応するものである。動物は、多少とも、ある種の微妙な刺激に反応することができるからである。パヴロフによれば、こ

の弁別は、大脳皮質の活動によって説明される。彼は、大脳皮質を一種の分析器であるととらえている。神経中枢の高次の層として、大脳皮質は、とりわけ認識に役立つ中枢を含んでいるのである。

パヴロフによって実験室で実現された場面と、自然の場面との間の差は、還元できないわけではない。両者ともその場面は、共存の関係や引き続きすぐに生じる関係をもった状況の集合によって構成されている。実験者の手による場面は、論証のために最大限、単純化されている。というものの、きわめて限定された2つの状況しか、実験者は相互に結びつけることができないからである。また、条件反射が生じるためには、同時に繰り返されなければならない回数や、反射の制止なしに条件反射がそれだけで繰り返す回数を厳密に測定することもできるからである。刺激を選択したり、同時に起こしたり、また一定の間隔をもたせたりすることは、実験者の意志によって統制されているのである。現実のなかで作用しているのは、実在（存在）という条件である。状況がたまたまそろっていたとしても、それがいつも同時に繰り返されるわけでない。ここからは、条件反射は生じないであろう。反対に、状況が、事実や場面と同じ次元に属するならば、これらの間で偶然の一致がきわめてしばしばみられ、関係が確立し、場合によっては、主体の行為に影響を及ぼすに違いない状況を予見する手段となる。こうして一種の反射的予見が組織され、各々の場合において、当を得た反応が選択されるのである。

パヴロフによって用いられた反応は、植物性の次元のものであった。最初の彼の研究目的は、餌の性質に応じた胃液の分泌の特殊性を調べることであった。それから、何かある刺激を餌の提示に結びつけようと考え、さらに、研究の順序が逆になって、彼の関心は、感覚刺激へと向かっていったのである。しかし、示された反応は、消化〔機能〕に関するものとどまっていた。彼の弟子の一人であるメタルニコフは、臓器的生活の領域へとさらに研究を進め、微生物（細菌）の注射をトランペットの音に結びつけて、条件反射による免疫反応を引き起こすことができた。さらに後には、このトランペットの音によって、血液中の白血球の数が増加することを確かめたのであった。もちろん、ここでの効果は、意志や意識的生活からは最も離れた、無縁なものである。

だが、他方で、パヴロフは、植物性の反射以外に、そ

の発現が関係の生活（la vie de relation）に属している別の反射を引用した。たとえば、「自由」の反射がそうで、これは、実験中、犬がきわめて活発な動きを起こすので、他の反射を形成することが不可能になるというものである。情動の場合、——その精神運動的效果はさらに生理的反応に集約的に基礎づけられているが、——特殊な動機や、ある事件と偶然に結びついた情動の本質とはまったく無関係に、ある一つの状況がその情動と永続的に結合し、ひき続きその情動が再現されるのに十分なきっかけになることが、とりわけしばしば見られるのである。（原注1 H. フロン『おちつきのない騒がしい子ども』第1部 第1章。パリ，Alcam, 1925を参照。）ワトソンはこのメカニズムに、すべての体系を基礎づけさえした。一つか二つの特別な刺激だけが、各々の種類の情動に対応しているようである。それらの動機は、その後、多様なものとなるのだが、その多様性は、習慣的に遭遇する場合であれ、突然遭遇する場合であれ、情動の無条件的な動機と何らかの状況との間でのそのような遭遇にのみ依存しているといえよう。こうして恐れが発現は、物音に対して平衡を失う特殊な反応なのだが、特定の動物やある場面への恐れとして、実験的に作りだすことができるのである。別の学者は、自動的な反応による非合理的な習慣も、身近な安心感や品性や基本的な徳性などに求められる子どもの情緒的な習慣も、このやり方で教え込むことができるのもちあげたのだ。つまり、避けなければならない習慣にはつらい印象を、勧めることのできる習慣には快い印象を組織的に結びつけるのである。自然は、多少は偶然にはあるが、これと同じように作用するに違いない。こうしてある学者たちは、子どもの最初の動機づけられた行為を条件反射のメカニズムで説明しようとしたのであった。

条件反射によって与えられた解釈のように、条件反射という手段で最初の心的な結合を説明することは、機械論的傾向である。その説明は、固有に存在する多数の要素から説明を始めるが、これらの諸要素の組み合わせだけでその後の発現形態を説明しなければならない。作用は、外部から及ぼされる。そこにはたらいっている諸要因は異なった状況であって、それらの異なった状況の組み合わせによって、効果の多様性が説明されるのである。主体の習慣、行為、知能は、最初の土台として、条件反射によって、主体が直面した刺激と連合するのであろう。これらの連合のうち、一つはパヴロフの連合や教師



がおこなわせる連合のように人為的であり、他方は自然のままのものである。実際、一つの場面には、常に相互に伴いあう状況と、まったく偶然的な状況とが存在する。偶然的な状況は、同じ場面が再現されるたびに、もう一度つくりだされる理由はなんらないので、条件反射を引起すことはない。反対に、日常的なあるいは必然的な共存関係によって同時に生じる状況は、条件反射をつくり出すのである。したがって条件反射は、いわば自動的に現実の構造と一致することとなる。その結果として、精神構造そのものは、遭遇した事実の総和にもとづくこととなるであろう。にもかかわらず、たった一つの出来事が、2つの刺激の間でみられる効果がいつまでも消えない転移の原因となることが、観察によって示されている。たとえば、ある一つの強い情動の衝撃のもとで生じる転移や、ある明解な事実に応じた転移などである。

ある学者たちは、なによりもまず、条件反射を、すでにまったく信用を失った連合説を正当化するための、いわば遺物 (posthume) であるとみなした。すなわちその最も外面的な側面しか考慮しなかったのである。[しかしながら]、条件反射においては、連合は同じ種類の要素間の、あるいは任意の要素間の受動的な結合ではない。それは、特殊な刺激以外に、付随的な刺激を自ら発見する反応なのである。他方で、それは、できる限り多様な印象を互いに弁別する能動的な過程を含んでいる。転移の行われる場合、連合は潜在的な感覚から引き離されていなければならない。条件刺激がきわめて特殊になり、感覚の正確な差異 (ニュアンス) に限定されなければならないとき、この事実はきわめて明らかである。しばしば難しくてわずらわしい、よく似た刺激の区別 (differentiation) を主体が強いられる場合、その区別は外部から引き起こされることもある。が、それは、多少とも対照的な刺激を単に重ねあわせることに帰着させることはできない。その区別は、条件反射のなかに入ってくるはずの特殊な印象に関する正確で微妙な制止の働きを前提とする。一般に、最初有効であった刺激が、一つの基盤 (土台) となって、その基盤の上で選択された刺激の性質がそれだけで活動的であり続けるのであろう。反射の機能的進歩やその学習、そしてその結果としての感覚的能力による比較や測定などは、結局、この分析能力にもとづいているのだが、それは、後の認識器官である大脳皮質の機能に結びついている。条件反射と知

的行為との間になんらかの類似性や関連があるとすれば、それは、この中枢の共通性や作用の類似性に帰されなければならないのであって、何か外的な偶然的なものをもつ連合のメカニズムに帰されるべきはないであろう。

そのうえ、実験室での反射の形成は、日常生活での諸条件と著しい相違を示している。パヴロフは、予期せぬ状況が途中で入り込んでくるのを防ぐために、実験用の静かな部屋をつくらせた。そして、ほんのわずかな偶発的知覚も、選択された刺激につけ加わったり入れ替ったり、また反射を制止したりするおそれのないように、光も影も部屋の様相を変えることができないようにしたのであった。反対に、自然環境では、状況が混ざり合い複雑である。そこで条件反射が形成されたとしても、他のすべての刺激を排除することでその刺激が選択されたことはあり得ないし、情動や感情の影響、あるいは知的な影響なしに考えることはできない。したがって、[条件反射による]説明は、見かけほど単純でなくなり、もはや別の事柄に依るのであって、それこそ本質的な問題となる。条件反射による説明は、もはや根本的な説明ではないのである。

ウィンチは、3、4歳までに達成した娘の進歩を条件反射のメカニズムに帰着させようとしたが、彼の示す事例では、実際に働き始めている要因が、絶えず説明からはみ出てしまっている。反射の出発点は、もっぱら食事に関することのようなのである。1ヶ月目から3ヶ月目にかけて、子どもは、白衣を見ると、授乳の時間が近づいたかのように、からだを揺らし始める。母親が看護師が彼女のところにやってくると、吸うしぐさを始める。母親が微笑むと彼女も微笑む。母親に気づくと泣きやみ落ち着くのである。だが、おそらく、母親と子どもと絆 (lien) は、生後数週間でさえ、[ウィンチが考えるほど]もっぱら食事に関わることだけではない。子どもにとって、母親は、別の満足感の源泉である。母親と子どもの身振り反応 (réactions mimiques) の一致は、何か任意の状況での一致のように、単に外部的で偶然によって生じるのではないように思われる。たとえば人の顔の微笑みをただ見るだけで、最初から微笑み返すことがなくても、子どものこの微笑みが一つの機能系に属していることは、Ch. ビューラーと同様に認めなければならない。表現力に富んだ表出によって、子どもは周囲の人々と結びつきながら、きわめて速やかに、この機能系にその使

命を与えるのである。そしてこの表出は、状況にうまく適応するが、このことは、条件反射の形成が必要とする多様な遭遇の結果によるのではなく、個人間の関係（rapports）の欲求に応じるためなのであって、表出は、そのための直接の手段（organe）なのである。

情動は、分化し体制化する年齢では、今度は条件反射の動機となり得る。生後7ヶ月になると、汚いからと叱られるので、子どもは産衣を脱がせはじめるや否や泣き出す。もっと後になると、父親がやって来ただけで涙をみせるようになる。というものも、このとき父親が、ばかげた話をするという良くない習慣が身についてしまっていたからである。15ヶ月目になると、とても不安な様子を示しながら、たえず右手を見つめている。というのも、蠅が右手の上にとまっていたときに、彼の祖父がいつも次のように言っていたからである。「気をつけな、蠅がおまへの右手を食べてしまうぞ。」その後、黒パンの屑がについたままになっていると、子どもは不安をかき立てる。それは、しばらくの間、子どもに手袋をさせる必要があるほどである。最初の2つの事例では、明らかに情動的な反応がそれとは直接関連のない状況に転移している。あとの（15ヶ月目の方の）事例は、脅かされた右手を見ることと不安とが、直接、結びついていて、条件反射の生じる余地はないように見える。

（続く）